

防災歳時記（6）

—さまざまな霧の生態—

NHK 放送用語委員会専門委員

元 気象庁天気相談所長

宮澤 清治

「霧」は秋の季語

10 月も半ばを過ぎると、秋の長雨(秋森=しゅうりん)の時期が終わり、秋晴れの候がやってくる。いわゆる「天高く馬肥ゆる秋」だが、朝がたの冷え込みは肌を刺す。

移動性高気圧に覆われると、昼間はさわやかな秋晴れとなるが、夜間は風が弱く放射冷却で冷える。すると内陸の盆地を中心に霧が発生する。「霧」が秋の俳句の季語であるゆえんである。

この霧を放射霧という。放射霧とは、夜から朝にかけて、地面付近の熱が大空に奪われ、気温が低下するために発生する霧である。



写真1 志賀高原から善光寺平の雲海を望む

放射霧の頂上の高さは、数十メートルから数百メートルぐらいで、霧の層は比較的薄い。早朝に少し高い山や丘に登れば、霧の海(雲海)を見渡すことができる。遠くの山裾などにかかる霧は、気象観測では層雲である。

●霧の深い朝は、その日は晴れ

●朝霧は鞍(くら)をおいて待て

放射霧は、昼間、気温が上がるにつれて消散する。だから昔の旅人は、朝の霧はすぐ消えるから、馬の背に鞍を置いて待ちなさいと教えた。

山の霧は悪天を呼ぶ

霧は必ずしも昼間に消えるとは限らない。山では、昼間から霧がかかり、そのうちに山全体が霧に包まれて見えなくなることもある。

この霧を滑昇霧という。低気圧が近づくと暖湿な南寄りの風が吹いてくる。この風が山腹を上昇するとき、気温が下がって水蒸気が凝結し、霧粒をつくる。山の天気が平地より早く悪くなるのはこのため。低気圧

が通り過ぎて、風向が変わるまでは霧が続く。

- × × 山に霧がかかると天気が悪くなる
- × × 山に鉢巻霧(はちまきの形をした霧)が見えると雨が降る

各地の山にはこのような霧のことわざが多い。放射霧は好天型だが、滑昇霧は悪天型である。

山の霧、海の霧は事故のもと

上信越の山地では主として梅雨時に濃霧がかかり、道路の閉鎖や交通渋滞が数日間も続くことがある。視界が悪いのにもかかわらず、スピードを出し過ぎて追突する事故が多い。霧の影響による交通事故の原因は、ほとんどが規制速度を無視した運転か、車間距離の不足である。

関越自動車道の渋川伊香保1・C一沼田1・C間(22.4km)に発生する霧は、6月、7月、9月の雨の降る時期に多く、冬でも発生することがある。

この地方で、霧が発生するときの気圧配置には二つある。

一つは日本の南岸に低気圧があるときに、三陸沖や関東東方海上から冷湿な北東の風が吹く。この風が山地を上昇して霧を発生させる。



写真2 関越自動車道の霧の警告板(赤城高原S・A)



写真3 北海道襟裳岬の霧笛発生装置

他の一つは日本海に低気圧があるときに、暖湿な南風が吹き、この風が山地を上昇して霧を発生する。

いずれの場合も気流の上昇による滑昇霧だが、放射霧や川霧などの性質も加わって谷間に霧を長時間、滞留させる。

夏期、三陸沖や北海道東部では霧が発生しやすい。釧路や根室地方の沿岸では、春から夏にかけて霧が多く、6~8月に霧の発生する日は平均して50~60日もある。霧笛が船の安全のために活躍する。

太平洋高気圧からの高温・多湿な南寄りの風が、北方の冷たい海(親潮)の上を吹くとき、下層が冷やされてできる霧である。これを移流霧といい、「かいむ(海霧)」「じり」「ガス」などと呼ぶ。